

氏名	高 村 博 正
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	文 学
学位授与番号	博甲第2034号
学位授与の日付	平成12年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	John Steinbeck and His Dramatic World : A Study of His Dramatized Life, Works, and Adapted Works (ジョン・スタインベックのドラマ的世界—劇化された人生 と作品および翻案作品の研究)
論文審査委員	教授 西前 孝 教授 古川 隆夫 教授 榎木 榮一 助教授 江代 修 安田女子大学大学院教授 林 徹磨

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、小説家ジョン・スタインベックの作品群における演劇的要素の重要性を論じている。ジョン・スタインベック文学は近年ふたたび注目を集める傾向にあり、国内外において多くの新しい観点からの真摯な研究が相次いでいる。スタインベックにたいする新たな注目は、もともと彼の作品に存する豊かで普遍的な予言的世界観がその原因であるが、同時に、スタインベックが演劇的手法を通じて描く窮状にあえぐ多くの登場人物たちの不屈の精神がその再評価も重要な要素である。彼の予言的世界観は現代社会において搾取される弱者たちの窮状を予見したが、世界中でいまなお繰り広げられる悲劇的な惨状がそれを証明している。スタインベックはあらゆる手法と戦略を駆使して、カインの末裔の過去、現在、そして未来を徹底して透視しようとする。そのためのスタインベックの武器と戦略は彼の多様性に富む執筆ジャンルであり、それは小説、短編小説、映画脚本にはじまり、海洋生物学者、従軍記者、エコロジスト、政治的活動家としての作品にまでおよぶ。

スタインベックのこの多様性を二つの要素が一貫して貫いている：(1) テーマ：あらゆる人間がもつ本質的要素にたいするスタインベックの興味——人間の誇り、発達、選択、勇気である。(2) 構造：スタインベックがこれらの芸術上のテーマを現実に模倣させる「からくり」として援用するドラマ的要素である。本論文は、小説家スタインベックが演劇に走った根本的理由は、彼が四十年代、五十年代の小説のリアリズム手法に限界を感じた結果、自らの芸術的/道徳的使命の体現にはドラマがより適していると判断したからであると論じる。スタインベックは「人間が完全になれる」という信念をもっており、この信念は彼の道徳的哲学的主張の根幹をなす。そして彼はこれをドラマ（演劇

化)を通じて表現しようとするのである。

本研究の対象資料は主にスタインベックの小説とその翻案劇である。最初の章は「スタインベックのフィクションにおけるドラマ的要素」であり、以後に発展する各論の基礎となる。

第二章「スタインベックのドラマの世界」では、小説家であるスタインベックが意識的または無意識的に演劇に傾倒する点を指摘し、その傾向の裏に隠された意味を探る。この論が本論文の根幹であり、次に続くスタインベックの各作品のより詳しい検討の土台となっている。

第三章は「アメリカにおけるスタインベックの翻案劇」であるが、アメリカにおけるスタインベック原作の各種の翻案作品を論じている。スタインベックが意図するドラマ的主張がどのように翻案作品として再生されるかを、成功作品と不成功作品の両方から論じる。具体的には、カーライル・フロイドのミュージカル、フランク・ギャラティの芝居、さらにフランク・ルーインのオペラを個々に詳細に扱っている。

本論文の主張の公正さと深さを図るために、第四章「日本における最近のスタインベック翻案劇」では日本における代表的翻案劇三作品を取り上げて論じている。日本におけるスタインベック翻案作品は本国の読者/観客よりスタインベックの本質(主張とドラマ性)をより効果的に表現できるケースがある。スタインベックの原作が国籍、人種、宗教などの境界線を超越することが可能になるのは、原作のもつドラマ性を翻訳家/読者/観客が積極的に体現するときである。

第五章『『エデンの東』(TBS版)はメロドラマか?』は、日本のユニークなテレビ翻案作品『エデンの東』を扱い、スタインベックのドラマ性を日本的な翻案例を通して詳細に論証する。原作と日本の翻案例との関係をメロドラマ的要素の観点から論じている。さらに、ドラマ性を論じるときに忘れてはならない点として、スタインベックの映画化作品も論じる。第六章「スタインベック映画におけるドラマ的要素」において、スタインベック作品の映画化作品および彼自身の脚本などを詳細に論じた。スタインベック原作に隠されたドラマ性の理解と誤解が映画化によってもっとも(時には逆説的に)顕著に表出するからである。

最終章「日本におけるスタインベック研究と、新方法としてのドラマからみた研究」は、わが国における半世紀以上に亘る活発なスタインベック研究の現状を分析するが、とくに本論文の骨子となっているスタインベック世界のドラマ性の研究方法を提唱している。この未踏の研究分野と方法こそ、スタインベック自身が成功不成功を問わず自己と作品の劇化を通じて世界に伝えようとした美的および道徳的人間観を解明する効果的方法である点を、本論は論証する。

結論は、本論文で提唱し実践したような劇化の面からのスタインベック研究方法が内外のスタインベック研究に大きく資する点を指摘し、スタインベックの世界の理解に欠かせないこと、そしてこのような新しい分野でのスタインベック研究が既存の研究で見逃され誤解されてきたこの作家のドラマティストとしての本質を見極める基礎となることを主張している。

学位論文審査結果の要旨

高村博正氏の学位請求論文に関する学位審査会は平成12年2月7日、学内からの委員4名と他に招聘教授1名の計5名によって行われた。申請者自身による論文の概要説明、委員全員による質疑応答、その後の審査委員の間での討議、というプロセスで進行した。

本論文は、アメリカの20世紀の作家ジョン・スタインベックの文学について、特にその演劇性の諸問題を包括的に捕らえようとする論考である。スタインベックはその活躍分野が多岐にわたることが特色のひとつとなっている作家である。長編小説、短編小説、ドラマ・映画の脚本、各種ルポルタージュなど、多様なジャンルにわたって作品を残している。思想的には、弱者を見つめる眼差しの奥にある人間性への究極の信頼が議論され、また文芸美的には緻密なテキスト分析がなされてきているが、高村氏の論文は、従来高村氏自身の業績を除けばあまり(否、ほとんど全く)顧みられることのなかった演劇性の観点から、作家の主要作品を再構成する試みである。小説作品の持つ演劇性から説き起こし、戯曲作品や映画のシナリオ、オペラやドラマへの脚色と上演、さらにアメリカと日本における劇団による翻案・上演にまでおよぶ意欲的な調査は、全く新しい研究領域を切り開くパイオニア的研究として高く評価されるものである。

小説作品におけるドラマ性の抽出は、5編の長編・短編作品の分析として展開される。ドラマ性はここでは作中人物のキャラクターライゼーションとプロット構成の問題として捉えられている。人物におけるアイロニー、悲劇性、ダイナミズム、リーダーシップなどの概念によって、各作品はスタティックな言語芸術のレヴェルからダイナミックなパフォーマンスのレヴェルへの読みの転換が意図されているのである。そしてその意図は満足すべき程度に成功している。

スタインベックは自らドラマの脚本や映画のシナリオ作品を残している。論文の第2章はこれらの分析に当てられている。自らドン・キホーテを任ずる作家の姿が、作品を通して、純真さと勇気と滑稽さと、そしてヒロイズムの中に投影されている様を描き出していく。従来個別的に論じられているだけで見えにくかったものが、ここではドン・キホーテのキャラクターライゼーションの中に統合されて明確なイメージを結んでいる。

本論文の特長は、第3章から第6章にわたって展開されているスタインベック作品のドラマ化、映画化、オペラ化、テレビドラマ化の実態調査とその検証・評価にある。この分野はほとんど先人のいない、いわば高村氏の独壇場となっている。アメリカにおけるオペラ化・ドラマ化、日本における著名劇団・歌劇団による舞台化、またテレビ局によるテレビドラマ化とその放映などが詳しく調査され、検討・評価されている。この努力は、スタインベック文学のアダプテーションの研究として重要な先駆的貢献をなすものであり、国際的にも重要な位置を占めるはずのものとして高く評価される。

勿論弱点も幾らか指摘された。スペリングやタイプのエラー、繰り返しの多用などの他に、内容的には、ドラマ性やアダプテーションの概念規定の希薄さ、などである。ただこれらは、論者自身においては、論文の展開のなかで実践的に乗り越えられている問題であって、論文自体の持つ学術的価値を損なうものでないことは委員会においても確認された。表現媒体である英語については、繰り返しが目立つ欠点はあるものの、全体として読み易く、達意の文章であり、学術論文の水準を満たす好感の持てるものとなっている。

以上により、審査委員会は高村博正氏の本論文を博士の学位論文として認定することに関して全員一致で合意した。